

世界と議会

World
and
Parliament

一般財団法人

尾崎行雄記念財団

www.ozakiyukio.jp

2016 秋冬号

OZAKI
YUKIO

尾崎行雄記念財団設立六十周年記念復刻

『尾崎記念会館・時計塔建設記』

— 建設の思い出と忘れ得ぬ人々／川崎秀二

特別寄稿

尾崎財団設立の追憶／高橋 大輔

連載『尾崎行雄伝』

第六章 改進黨・自由の泥仕合

INPS JAPAN

国連、レソトの貧困撲滅支援強化へ



『世界と議会』

(秋冬号) 目次

号堂言行録 (2)

尾崎行雄記念財団設立六十周年記念復刻

『尾崎記念会館・時計塔建設記』..... 川崎 秀二 (4)
—— 建設の思い出と忘れ得ぬ人々

特別寄稿

尾崎財団設立の追憶 高橋 大輔 (24)
(尾崎行雄記念財団研究員・IT統括ディレクター)

◆尾崎行雄記念財団設立六十周年 協力者一覧..... (30)

◆尾崎行雄記念財団 役員一覧..... (33)

連載『尾崎行雄伝』 第六章 改進黨・自由の泥仕合 (34)

INPS JAPAN

国連、レソトの貧困撲滅支援強化へ..... (43)

財団だより..... (46)

民政維新は国民総がかり

勝っておごらず、敗れて屈しないのが大国民の性格である。しかしわが国民は日清・日露の両戦役に勝つと大いにおごって、自ら世界の最優秀民族なりと誇り、自らアジアの盟主と称した。「敵を知り己を知れば百戦危うからず」という戦争の鉄則を忘れて、無謀な戦争に飛び込むほどに、おごり高ぶった。：

敗戦後の日本には、残念ながらどちらを向いても、敗れても屈しない大国民の性格を見出すことはできない。しかしながら本来の日本人は、一度敗れただけで再び立つことができないほどの意気地なしではないはずだ。

私は、すべての日本人が、無条件降伏という未だかつてない大敗北を、徹底的に認識することを切望する。このくらいの困難にへこたれて、平常心を失

うようなことでどうする。われわれは、もつとひどい困難がくることを覚悟しなければならない。この困難を乗り越えるには、明治維新をやり遂げた人たちの数倍の勇氣と覚悟が必要だ。

明治の王政維新は少数の勤王志士でやり遂げたが、今度の民政維新は、国民総がかりでやらなければならない。そこが王政維新よりも難しい点である。また王政維新は、幕府という形を持った敵に対する革命であったが、今度の民政維新は、自己に内在する封建思想の破壊を前奏曲として始めなければならない。しかも、その自己革命は、断じて責任を回避しない勇氣と、冷徹な自己解剖の批判力がなければやれることではない。：

民政維新に最も必要なものは批判的精神である。

上からの命令や指令を鵜呑みにして盲動するような国民では、とても民政維新を成就することはできない。行動する前にまず批判せよ。それが誰からの命令・指令であろうとも一度自分の良心のふるいにかけて、その後に行動する。そして、その行動に対しては、どこまでも責任を取る覚悟を持った人々によつてのみ、民政維新の大事業は成し遂げられるのである。

二〇一三年『民主政治読本復刻版』
(原著・一九四七年)より



昭和17年、新潟にて意見書執筆中の尾崎

美事なる

この議事堂に

ふさわしき

議員を得るは

何時の代ならむ

昭和十一年

尾崎行雄



提唱は政治家たち

罌堂・尾崎行雄の衆議院葬が昭和二十九年十月に築地本願寺で盛大に行われたあと、何かの会合で政治家達の間に「よくこの頃外人から日本にはなぜ政治家の記念館がないのかと問われ、恥ずかしくなる。尾崎先生ならば、超党派でまとまるから、記念館を建てたらどうだろう」と話が出た。私もいつかはこれを実現して罌堂の高邁な精

神を世に伝えようと思った。昭和二十九年春から政局は動揺を続けていたが、吉田内閣の瓦解から鳩山内閣の誕生へと進み、その間私は政界の第一線で多忙な日々を送り迎えて、この事を推進する事が出来なかった。そのうちに尾崎罌堂全集の刊行が企画され、金森徳次郎氏（故人・当時国立国会図書館長）を委員長に、鈴木正吾氏を編集責任者として全集が刊行され、十二巻の書物が出来あがった。これを仕上げたのは公論社の久保山雄三氏で、氏はあらゆる経済的困難を克服してこの事業を完成した。刊行祝賀会の時、久保山氏は私に向かって「今後全集の利潤があれば、それを献金するから国有財産の土地に尾崎記念会館を建立しよう」と提議された。前々からこの事を念頭においていた私は、ちょうど保守合同が出来、厚生大臣を退いて党へ帰っていた頃で、俄然この計画に闘志が湧いた。まさか、本の利潤だけで記念会館も建つまいとは思ったが、何かの起点があれば尾崎会館は出来るかも知れないと考えたので、一体土地を国会が

『尾崎記念会館・時計塔建設記』

本稿は、尾崎記念会館（現・憲政記念館）が建てられた一九六〇年の翌年に発行された『尾崎記念会館・時計塔建設記』から、川崎秀二・初代理事長（第二十七代厚生大臣、一九一一―一九七八）が執筆した「建設の思い出と忘れ得ぬ人々」を抜粋・編集したものです。当財団設立六十周年を記念し、ここに掲載します。



建設の思い出と忘れ得ぬ人々

川崎 秀二



いうから不思議である。築城の名手「加藤清正の邸」とあれば、いかに景勝、天下俯瞰の土地であるかは自ら明瞭であろう。

スマートな会館・
周囲との対照美

記念財団が誕生して、会長は歴代議長が名誉的に継承するという原則が出来、理事長は郷土の三重県との関係、罌堂と故人川崎克との関係、そして名誉議員以来の晩年の罌堂との関係から私が推された。

提供してくれるものかどうか、私はひそかに当時の大池（眞）衆議院事務総長に相談してみた。

大池氏は永く尾崎先生の崇拜者で、名誉議員の称号贈呈のときも同氏の深慮により事が巧く運んだ事を思い出す。大池氏は「それは罌堂の事だから必ず全議員が賛成してくれるだろう。従って土地は提供するだろうが、公共建物でなくては国有地に建てさせない。完成後は国有財産にしなければ維持が大変だから、どういう形で造るにしても後は国会に寄付することにしたらい」と、大体の私案を示してくれた。

ただ、それでは建設費をどうしてまかなうかであるが、これは衆議院でやるわけにも行くまい。結局衆議院がバックアップする事として、記念財団を創立してこれに当たらせたらどうかという構想が生まれた。

たまたま尾崎先生を追慕する人々の中にも、記念会館建設とともに罌堂の業績を顕彰し、その精神を伝えるための財団を発起する動きがあったので、両者が渾然となって尾崎記念財団が誕生した。

大池・鈴木両総長の構想

衆議院の持っている土地の中で、一番良い場所である三宅坂の台地が決まったのは、大池眞氏（当時衆議院事務総長）と次期の鈴木隆夫総長が心配してくれたのであり、また、議院運営委員会の顔役である椎熊三郎氏が何くれとなく面倒を見てくれた結果である。

旧陸軍省跡というより参謀本部跡といった方が一般にわかりやすい。この土地一万二千坪の中に記念会館建設が決まった事が成功の源でもあり、また日本の歴史の上で深い因縁とつながりがある。旧軍閥の総本山のあった所に、平和論者の罌堂という取り合わせも皮肉であるが、幕末の中心人物・井伊直弼大老の屋敷跡でもあった。

井伊大老は勤王の志士のために暗殺されたが、彼が開国論者であった事は有名で、先見者という点で罌堂と共通のものがあった。

ところが更に歴史を遡ると、この地は、加藤清正が豊臣秀吉に従って関東征伐に來た時に足を延ばして江戸に入り、暫くここに居を移していたと

三宅坂の土地借用が決定したのは昭和三十二年五月であった。これは何といっても国会、特に衆議院の議運が満場一致で会館の建設を認めた結果であって、裏面の努力はしたが、これをなくして今日の成果は期して得られなかった。

設計は懸賞公募とした。そして日本の公共建築物では初めての公開競技にした事も、公正の精神に則ったものである。約六ヵ月間の審議を経て五名の優秀設計者と作品が選ばれ、この予選競技のあと決勝競技を行って、海老原一郎氏の設計が当選したのである。

これは日本建築家協会に全面的に依頼したもので、審査委員も前川国男氏ほか数名の権威者によるものである。私は二階建ての建築が素人眼によいと考えていたが、海老原氏の設計はスマートな一階建てであった。

当選の理由を聞いてみると、周囲に国会議事堂、国会図書館、その他の豪宕巨大なビルがある中で二、三階の建物はコントラストが悪い。むしろ広大な霞ヶ関公園（＝国会前庭）の一万余坪を巧く活用して、フラットな建物の方が鮮明な印象を与え

るという事である。

また記念館は、リンカーン・メモリアルにしてもみな平屋造である。「簡素優雅」という事が決定的な条件であるし、予算の関係をも顧慮すると流石に名だたる審査員諸氏の決定かなと感銘した。素人の私達がカブトを脱いだのも当然であるが、会館の設計、管理には全然容喙しなかったのである。

独立時計塔への意欲

建設推進者として、私が注文し実現したのは時計塔の独立とその高さであった。

はじめ海老原氏の設計では「時計塔」は十五メートルの高さで記念館に接近していた。しかし十五メートルでは、丸の内はおろか、霞ヶ関一帯でもその存在がわからない。

そこで私は元来時計塔を建てる意義は、罌堂がやかましかった「会合時間の厳守」を周知させるためのものだから、十メートルや十五メートルの高さでは問題にもならないと、建築法の制限一杯

で、いよいよ気を良くして、工事着手後も設計管理にただならぬ熱意を示したものである。

時計塔を三角塔にしたのは立法・行政・司法の三権分立、互いに侵犯すべからざる事を強く提唱した罌堂の主張を取り入れたものである。

チャイムは流行にとらわれず、末ながく聴衆の心に残るメロディにしたいとの思いから、「椰子の実」で知られる作曲家・大中寅二氏に作曲を依頼、快諾頂いて実現した。

ワシントン市と尾崎のキズナ

工事は三十三年十一月、大成建設と大阪暖房が請負って、三十四年春までに竣工する事を日程としたので、この方は心配がなかったが、建設資金を集める事と、会館建設を有意義に、かつ事故なく有終の美を飾るためには根かぎりの努力が必要であった。

私たちは尾崎メモリアルを単なる記念物とするのみでなく、世界平和や議会主義のシンボルにし

まで伸ばすべき事を主張した。

制限は三十一メートル五十センチ、奇しくも百一尺余である。それなら「百尺竿頭一步を進める」という事になり、進歩的思想を表現する事にもなる。これで決まった。その結果、会館との距離を拡げることとなった。

この点では海老原氏と最初意見が合わなかったが、次第に気心も合うようになり、また海老原氏も時計塔の模型を発表して世評の絶賛を浴びたの



ようと考えた。まず世界の各国から記念会館の周囲に植物を贈って貰うことを提案してみた。これが三十三年の春であった。

たまたま私は前年夏、社会党の柳田秀一代議士と同道して欧米諸国の予算制度視察の旅に出た。ワシントンで市長のロバート・マクラリーン氏に会った際、会館建設と往年の罌堂がワシントンポトマック公園に贈った桜の木の話をする、マ氏は、「今や桜はワシントンの名物となり、全米のあこがれの的となったので必ずその返礼はする」という快い返事であった。

翌年春アメリカからドッグ・ウッド（はなみずき）二百五十本が贈られた。これは全米からの贈り物というので、各州の「はなみずき」であった。マッカーサー駐日大使を国会わきの広場に迎えて贈呈式を行った。このアメリカの国花は将来霞ヶ関公園が完成することと並行して会館の周囲に植えられるが、現在は東京小金井の苗床で保育されている。

記念の樹木が贈られてくると、私はまた野心を出して、建築物に各国の建設資材や記念物を置け

ば、これは世界連邦を唱えた罌堂の思想を形に現すこととなると思った。

そしてそのきっかけとなったのは、現在尾崎記念会館の玄関を入った展示場の入口にある記念碑で、これを御影石ではりつめるとすれば、その御影石はスウェーデン産に限るという事であった。スウェーデン大使館を訪れて、一か八か当たってみると大使は快く応じてくれたばかりか、電報で本国と打ち合わせをし、荷積みの船から、ゲートボルグー横浜間の費用一切は同国の船会社に無料奉仕させるなど、細かい心遣いをして頂いた。あの黒淡色の御影石は世界最高の色合いだという。

これに味をしめた訳ではないが、折角ならば多くの国々の協力を得たいものと考え、私は都内の六十数ヶ国の大・公使館を歩いて協力を要請した。各国大公使館が会館建設の意義を高く評価して、それぞれ自国の特色を表した品物を競争的に寄贈された。

数え上げればきりがなが、イギリスが世界の議会政治の母国たる誇りを持って旧議事堂の飾り石を贈ったのは一つの意義を持つ。

アメリカからは罌堂の尊敬した民主政治の父「リンカーン」の頭像、ドイツからは芸術家と政治家の両面を持った詩聖ゲーテの胸像、そのほかにも東南アジア諸国、ヨーロッパ、南米、豪州等からぞくぞく記念品が贈られた。その度に新聞、ラジオ、テレビがかかさず最大限の協力をしてくれた事が、国内に大きな反響を与えずには置かなかったのである。

時計塔裏話

時計塔に掲げられたスイスの時計には多少の経緯がある。これは当初、勿論日本の時計を掲げる計画であった。ところが色々と手違いがあり、話が進まぬ中に記念会館建設の工事が進み、時計塔の模型も出来た。このままではいけないと感じたので、各国大使・公使を訪問している最中に、スイス大使に話を持ち込



んでみると、大使は「それは難しい仕事だ。しかし実現すれば意義は深い。あらゆる観点から検討して可能かどうか、から始めよう」と慎重な対応で、しかし是非希望の線へ持って行くという厚意のある回答であった。

それから約一年位、スイス時計業界と在日スイス大使館、尾崎記念財団、衆議院電気施設課の間に十数回の往復文書の交換があり、専門的な交渉が行われた。これが新聞に大きく報道されたので、日本時計協会も真剣に考慮されたのであろう。ぜ

ひ日本の技術を尊重して、スイス側との話を出来るなら取り止めて貰いたいとの要望が来た。

私は国産奨励の建前からその話は当然であると思って、スイス大使館に電話して事情を打ち明けようと思ったら、その日、大使から時計工業会と時計商工会議所の二団体で、日瑞親善の見地から、正式に贈呈方を受託した文書が到達したという知らせがあった。こうなれば、もう国際信義の建前からも撤回する訳にはいかない。

かくて尾崎記念時計塔の時計は、平和の国スイスから贈られる事になったのも奇しき因縁であった。

音響効果にNHKの協力

会館の設計が決定する少し前、国会議員の多くの人々、特に西尾末広氏、加藤勘十氏、星島二郎氏等から、折角出来上がるのに講堂の収容能力が三百では物足りない。せめて五百は欲しいという注文が強く主張され、私も勿論その説を取った。

そのため設計は変更となり、海老原氏も一段と

苦勞し、実際の設計に当たった前田治男君は苦心の末、見事な設計を完了した。

さて講堂は、講演本位の建前をとったため、肉声でも充分に聞き取れる「反響の良い講堂」の設計ということになって、NHK放送技術研究所の協力を得る事に成功した。同研究所は、詳細に設計図の検討修正を加え、音響効果の測定など、約半年にわたる技術指導を行い、今日の講堂ができた。

第二回の尾崎記念講演で、中山伊知郎博士が「ずいぶん各所で講演しているが、今日くらい楽に話せたことはない」といったので、NHKの技術陣の協力の話をするに「成程そうか」と深く頷かれた。その前後、小泉信三先生や三木武夫氏も同様な感想を持たれた。

なくなった浅沼稲次郎氏が「僕や川崎君は、ここではマイクは邪魔になるね」といつていたのも一つの思い出になる。

銅像と絵画など

銅像は始めから彫刻界の最高権威者・朝倉文夫先生にお願いするつもりであった。

朝倉氏は戦前に罌堂を知っておられ、内意を打診すると「是非私にやらせてくれ」という意欲を示された。製作にかかるまで随分資料を集めて構想を練られたようで、財団は罌堂の演説している



ん。竣工までに必ず間に合います」といわれた。朝倉さんはその時、銅像の下敷きとなつて腰を痛められ、約一ヵ月療養されたが、そこから起ち上がって現在の銅像を見事に完成された。そして前の原型より一廻り大きい七尺大の銅像となった。厳しい顔付きに親しみを漂わせて最後の渡米を終った九十一才の罌堂の印象がそのままに浮かんでいる。

講堂に掲げてある罌堂像の絵画は小磯良平氏の作だが、小磯さんは尾崎先生と面識がなかったのだ、いろいろと苦労されたようである。

幸い小磯さんは逗子の風雲閣の下にアトリエがあるので、しばしば尾崎行輝氏をモデルに足を運んで貰ったが、眼付だけは行輝氏が似ていない。あの八方にらみといわれる鋭い眼は行輝氏の長女、つまり罌堂のお孫さんの眼が一番よく似ているというので、同夫人に数日間座って貰って遂に完成したものだという。

会館の玄関にある松林桂月翁の「霊峰富士」は、記念碑とのコントラストとして、現代最高の日本画家に富士を描いて頂こうという構想に基づいた



ポーズをと素人の注文を出し、朝倉氏もそれを受け入れて考えて頂いたが、熟考半年にして返事があつて「演説の写真を十数葉集めて想を練ったがどうしても巧くゆかない。銅像は矢張り静かな姿が良いと思う。罌堂が一九五〇年アメリカへ赴いてその帰途ホノルルで、ハワイの在留邦人に別れを惜しんで帽子を振っている姿が良い様に思う。もし財団が賛成ならその構図で製作してみたい」という話、財団でも周囲の情勢から勿論巨匠の説に賛成した。

三十四年九月に銅像の原型が完成した。その制作をマスコミに公開するその日、朝倉邸のアトリエで、それを見やすくしようとして、ちょっとした事故のために原型が倒れてしまった。一時茫然自失していた朝倉氏は、しばらくして自分の手で傷ついた原型をメチャクチャに壊してしまった。私は映画で観たフランスの絵画の天才達が、気に喰わぬ自分の作品を片っ端からナイフで破るのを思い出した。それほどまでに眼を覆いたくなる悲痛な場面であつた。

直後、朝倉さんは決然として、「御心配いりませ

もので、松林翁は自信をもって、近来最高の出来であるといわれている。

展示場の「罌堂翁の生涯」を象徴した主なる場面十二景は、郷土三重県出身の十二画伯が分担製作して献上したもので、意義すこぶる深く、後世に伝えられる美談である。

これは上野市の松浦莫章画伯が自費と暇を割いて奔走したもので、よくも十二人の画伯の気持ちを一連の心境に集めたものだと思う。中には実地検証のため神戸港を何回も訪れたり、東京、山梨県境の水源林を調べたり、先輩画伯に欠点を指摘されると何度も書き直した新進画伯もあり、文字通り郷土の大政治家の足跡顕彰に意気込んだ後輩の意気を偲ぶ挿話が次々に生まれた。十二景のテーマと作者は次のとおりである。(カッコ内の数字は、描かれている罌堂の年齢)

「新潟新聞主筆として赴任」(二〇・萩森久朗)

「保安条例による東京退去」(二九・小林藤四郎)

「第一議会への登壇」(三三・橋本綏可)

「東京市長として水源調査」(四六・中出三也)

「桂内閣弾劾演説」(五六・山尾 平)
 「軽井沢での炭焼」(六三・奥山芳泉)
 「芝公園で普選演説」(六五・森谷重夫)
 「遺骨を抱いて神戸上陸」(七六・平井憲廸)
 「辞世を懷に挑んだ林内閣弾劾演説」(八〇・松生正彦)
 「池の平でのスキー」(八四・平野一男)
 「天皇陛下に拝謁」(八八・松浦莫章)
 「ワシントンの葉桜」(九一・山名 武)

天皇陛下の御下賜金

募金目標は最初一億円であったが、設計が時計塔の独立ということで変更になり、「講堂が三百人収容では手狭だ。五百人にせよ」という理事会の要求で、時計塔を含め総工費一億六千万円の目標となった。最初の一年は益谷(秀次)議長が主に奔走された。

昭和三十二年晩冬、私はヨーロッパから帰って、未だ一千万円程しか集まっていない現状をみて、これは募金のため理事長自身が足を運んでせつせ

とであると宮内庁長官は説明された。陛下は、終戦の年の暮れ、尾崎先生を宮中に召された時のことを思い起こされたことであろう。

挙県献金の三重郷土

罌堂を生んだ三重県が、今度のことで見せた挙県のな応援ぶりも特記しなければならない。

ただしこれは伊勢湾台風という思いがけぬ被害が突発したため、民衆の盛り上がりというより、田中覚知事以下官公私団体の協力という形になった。

植村(甲午郎)氏が募金のとくに冗談ともつかず、「川崎さん、こういうものがうまく行くためには、地元が大体一割は持たねば成り立ちませんよ。三重県は貧乏県だが、せめて四日市に工場を持つ会社に奮発させるんですね」といったことを私は冗談とは思わなかった。

加藤(鏝五郎)衆議院議長を動かして、伊勢神宮の帰途、津市で「尾崎記念会館建設懇談会」を

と動かねば駄目だと知った。周囲もしきりとそれをいう。その時最も深い理解を示したのは経団連副会長の植村甲午郎氏である。植村氏は、「尾崎さんは憲政の神であるが、財界は世話をして貰った事がない。むしろしばしば攻撃された。しかしあの様な全国民の幸福を考え、独裁政治を排して今日の民主政治の基を築いた人にこそ感謝は捧げるべきで、財界も進んで協力すべきだ」と述べ、その後終始、経済団体を動かしてくれた。

私はこの様な仕事は、大義名分が第一であると考えた。国会議員は当時の自民党幹事長三木武夫氏と社会党の浅沼稻次郎氏の会談で、全員一人宛五百円の献金と、益谷議長の発議による有志の大口献金が始まった。こうして「議会政治の父」の記念会館という意味で、県・市・町村会議員まで少額ずつでも集める筋を通した。

そして議会主義昂揚の見地から、天皇陛下にも宇佐美(毅・宮内庁)長官を通じ、御内意を伺ったところ、陛下は直ぐ御聴取りになり、昭和三十三年十二月十五日、金一封を建設基金として御下賜あらせられた。かかることは前例のないこ

開催し、三重県下の協力団体、個人を要請した。幸い田中知事は先頭に立つてくれた。

たまたま伊勢市にも尾崎旧邸を改装し「罌堂記念館」の建設が始まり、その資金に行き詰まっていた折柄だったので、東京、伊勢と二重の募金はまずい。一本にして、千五百万円を目標とし、一千万円を越えれば財団から伊勢市へ余分を寄贈することとし、本部長に野呂恭一県議会議長、実際の推進者として二宮出納長、坂口県議会議事務局長を中心に運動が続けられた。

三重県の財界で三重交通の安保正敏氏、百五銀行の川喜多壮太郎氏、東海製糖の川村恒一氏等が示してくれた厚意、各種団体、市町村当局、高、中、小学校等の挙県一致の協力で遂にその目標の大半を達成し、伊勢の罌堂記念館は三十三年五月に完成を見た。

歴代首相の厚意実る

益谷会長の基礎づくりの厚意、星島会長の財界

膨張した建設計画を財界に説明して信用を得た小田部三平君と二人で大手筋の金融証券界を廻ってくれたのは更に大きな効果を上げたと思っている。

小田部君は珍しい募金のエースで、マナスル登頂の成功も、国際文化会館も同君の献身的奔走と、無欲公平の人格がものをいったと聞いたが、尾崎財団は氣に入りとみえて、成功したのちももう他のことは手伝わぬとして腰を据えたのである。

財界の主要筋は殆ど例外なく、この趣旨を了解し協力して戴いたが、その間特にお世話を頂いた方々に八幡製鉄の藤井丙午氏、富士製鉄の永野重雄氏、日本鋼管の五堂輝雄氏、興銀の川北禎一氏、銀行協会の堀・金子正副会長（当時）、専務理事水田直信氏、藤原総務部次長、経団連事務局の花村次長、久保田総務部次長、三橋会議員課長、大阪商工会議所杉道助会長（当時）、日本映画協会永田雅一氏、私鉄連合事務局の杉田道夫氏等の積極的な発言と御協力には感謝の言葉がない程である。



方面への斡旋の時代を経て、加藤会長時代は各方面への要請と、世界各国からの記念品贈与、往復文書に明け暮れたが、その間加藤会長は議会の多忙を割いてあらゆる行事に列席されたのは全く忘れられない感激である。清瀬会長は昔大養木堂の門下生で、また尾崎先生にも私淑するところがあった、これまた深い廻り合わせである。会館竣工の直前から今日まで種々指導もされ、面倒も見ている。

この間首相は三代であつたが、石橋湛山首相は、総裁決選を三日後に控えた三十一年の財団創立總會の日、総裁候補でただ一人出席し、「憲政の大先覚者の教示に従いたい」と挨拶した事は鮮烈な印象として残っている。

岸信介首相は尾崎記念会館の建設には随分協力し、財界某会社の大口が最初に決まったのは氏の仲介であつて、私は政治的立場の如何を問わず、この誠意には深く感謝し、予算委員会でもこれに言及したことがある。

池田勇人現首相が通産相時代、わざわざ伊藤秘書官を派遣して、当時経団連の推薦で財団に入り、

全国青少年の涙ぐましい協力

財団関係者を一段と奮い立たせたのはほかでもない。高等学校、中学校生徒の募金と海外在留同胞の送金である。

松岡駒吉副会長は「財界や公共団体の寄付だけで、これが建ったのでは意義が薄い。この募金を通じて後世の国民に尾崎行雄を印象付け、議会主義を教えねばならない」と発議され、みずから高、



中学の全国理事者に会われ、学校長の決議をとられるところまで持つて行かれた。

その後、私は久保（作次）事務局長と数回各種の学校長会議に出席して醸金を依頼した。その結果全国から次々に寄付が寄せられ、大は二万数千円から小は十七円までが建設基金に寄せられた。遂にその年の末、二百七十万円以上が集まったのであるから、「塵も積もれば山となる」のたとえで、この高、中学生の醸金こそ今度のことの最大の意義ともいえる。財団では近く約束の「尾崎行雄伝」をこれらの学校に配布したいと計画している。

海外同胞の醸金は私の発意で、罌堂は常に海外への平和移民と進出を唱えていたから、是非これを実現したいと理事会に提案して賛成を得た。

私は昭和三十四年夏、北中南米視察旅行のかたわら、各地でこの事を訴えた。各地の日本大・公使館の協力でこれも成功を収めた。

南米サンパウロ、北米ロサンゼルス、南米の頭とし、ハワイ、サンフランシスコ、ニューヨーク、シカゴ、トロント等の北米・カナダを始め、南米のブラジル、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、

知事会が決まり、市長会も田中事務局次長や野口行政部長の下準備と金刺会長以下、比較的私の知り合いが多い関係もあつて、スムーズに運んだ。町村会もこれにならつて、全国の町村に推薦書を廻布してくれた。

競輪の寄付を受けるかどうか、申し込むかどうかは財団でも一番苦悩した点である。随分議論もしたが、社会党の横前書記長がどこから聞いたか「もし醸金すれば受けてくれるか」という事になり、全国、全階層という点からこの大口醸金を素直に受け入れた。後楽園の林大作氏、真鍋八十八氏にも随分苦勞をかけた。

モーター・ボートの笹川良一氏が本年募金の締め切り近く最後の寄付をされ、ついに建設募金は完了し、建設費、施設費その他一切の支払いを済ませた。

思えば笹川氏は、罌堂が往年テオドラ夫人の遺骨を抱いて帰国し、神戸港に上陸した際、暴徒の襲撃から罌堂をまもった愛国者である。戦争中も国粋同盟を率い、右翼といわれながら、東条軍閥に反対し、翼賛選挙反対同盟の旗振りで、いわば

中米のキューバ、パナマ等からもぞくぞく集まり、総計四百万円を超えたのも驚異的であつた。久保事務局長もハワイの募金に出かけ成果を収めた。

私がカナダのトロントで第三世かの実業家に会った時、彼はよく廻らぬ日本語で「日本の政治家は誰が良いのか悪いのか区別がつかない。ただ戦争を起こした軍人政治家が悪くて、その時平和を護り我々海外同胞の事を心配してくれたのが尾崎さんだったことだけは知っている。少しでも送金したい」といったのには何かジーンと頭にこびりつき、涙が滲んで来た事を思い出す。

公共団体と公営スポーツの協力

三重県知事と東京都知事の発議で全国知事が協力の申し入れをしてくれたのも大きい。

この時、三重県と東京では地元と建設地というので、他府県から体よく拒否される形勢があつたのを、斎藤（寿夫）静岡県知事が真つ先に賛成してくれたのが大勢を動かした。

右翼的議会主義者といえる人である。

氏はまた今度尾崎記念会館建設募金の掉尾を飾った。氏と罌堂の結びつきは容易ならぬ宿命のように思われる。

大成果の色紙展

この様な計画と募金を成功させるために財団は、三十四年十月に東京三越で「各界名士色紙展覧会」を、越えて三十五年一月には「各界芸能大会」を行い、真に国民的な盛り上がりを推進した。

前者は政界の大物達に愛蔵の品物を供出して貰つて、まず出費の最低限を調弁し、各界五百枚に及ぶ色紙の売り上げを純益と見込んだ作戦が功を奏し、収益百四十万円余という成績を上げた。色紙では矢張り政治家の物がよく売れ、松林桂月、林武両画伯の協力が大きくものをいった。水谷八重子、久保田万太郎、佐藤春夫、栃錦、江戸川乱歩等各界でも人格が優れ、年季の入った人々の揮毫が売れた。その中で、故川崎克の愛蔵品「伊賀焼」

の壺、岸首相の供出した故原敬首相の筆、罌堂、故鳩山一郎氏らのものが高価で有志の手に入った。また漫画家の那須良輔、杉浦幸雄、清水昆、近藤日出造、中村良二の各氏には、政界人漫画などで多大の世話になった。

「芸能大会」も徳川夢声氏の司会を始め、中村歌右衛門以下の歌舞伎俳優、市丸、勝太郎のオールド・スターから、三橋美智也、ダーク・ダックス、水原弘、コロンビア・ローズ等四十数名の総出演のほか、横綱栃錦が日比谷公会堂であとにも先にも一回きりの手数入りを行ったが、この方は余り役者を揃え過ぎて、切符の発売に手が抜け、若干の欠損をした。しかしこの二つの催しで、世間へのPRは、竣工を控えて十分に浸透し、各界の共鳴を促すに至った。

徳川夢声氏は「如何に故人の徳が大であったかは知らぬが、あんな豪華メンバーがよく揃ったものだ。あれは三日間に分けてやった方が入りも良かったろう」と批評したのもうなずける。この催しに参加して頂いた人々に深甚の感謝を捧げたい。

その他日本国内で醸金の代りに現物を以って協

力してくれた人々の名前は枚挙にいとまがない。例えば淀川製鋼社長の浜田正信代議士は、今回のことを稀にみる義挙として時計塔の鉄材一切を供出、これに類するものが他にも数々あったということだけを記しておくにとどめる。

尾崎記念会館の意味するもの

今度の事は財団の役員、職員あげて努力した結果である。

特に総務課長の前出健二君は、三重県阿山郡から家郷を棄てて財団の業務に没頭した。その精力的な動きと、細密な計画は久保局長、小田部次長を助け、ともすれば沈滞の雰囲気陥る財団を活気づけ、ついに目的を達成する原動力となった。

彼と衆議院管理部に転出した俊才・金子武君とのコンビが財団のエネルギー源であった事は何人も否めないところであろう。

役員では、罌堂かつての秘書・伊佐秀雄氏、職員では勿論、事務局長の久保作次君。この二人が

私を助け、いわゆる阿吽の呼吸で堅実に事を運んでくれた。その数々の思い出は筆舌につくせない。私は二人に対し感謝の念で一杯である。随分辛い

思いをさせたこともあると思う。計画を推進するため持ち前の馬力に物をいわせた私であるが、時には人々の面前で両君に大声叱呼したこともある。建設完成の今日では私は両君に「許してくれ」といいたい。

尾崎罌堂は生前、銅像の建設の議が起こつた際ひどくこれを嫌い、一度は納得したが西尾除名問題でその擁護に起ち、議員の反感を買い銅像問題をフイにしたことがある。しかしいささかも意に介せず、むしろサッパリした面持ちだったという。偶像崇拜や虚栄、形式を極端に嫌う罌堂らしい物語である。

その西尾末広氏が終始副会長として心配され、計画や募金や行事などの一切に関係して頂き、いま民社党の党首でありながら財団の副会長を名譽とされている心境には敬意を捧げたい。

罌堂は地下で今日の事を喜んでいるのか、悲しんでいるのか私には分らない。ただ愉快なことに

は、生前銅像建設を嫌った罌堂であるが、明治二十三年十月『見附跡利用論』という一文を草している。

「私が若し世に尽し貢献するところがあつて、後年記念碑を建ててもらふようなことがあつたら、私は見附台上を希望するであろう」と書いている。……とすれば、四谷見附などというのであろうが、場所としては冒頭述べた様に現在地が最適である。

これから四、五年後には会館は文字通り霞ヶ関公園の中心となる。そしてその周囲には世界各国から寄せられた樹木も小金井から移植されて日本国会の成長を眺めることとなるう。

ただ罌堂が喜んでくれるかどうかは、会館の建設ではなくして、その残した思想、世界平和の樹立、議会政治の貫徹、そして公明選挙の実現等がこの会館を土台として普及し、その実りが多いかどうかにかかっている。

(了)

特別寄稿

尾崎財団設立の追憶

高橋 大輔

(尾崎行雄記念財団研究員・IT統括ディレクター)

一九五六年(昭和三十一年)の時代背景

二〇一六年、私たち尾崎行雄記念財団は設立から六十周年の節目を迎えます。

罫堂・尾崎行雄の没後、その衆議院葬が東京・築地の本願寺で執り行われました。葬儀の席で数名の参列議員の発案から財団の設立、ひいては記念会館や時計塔の建設につながりました。

果たして今から六十年前、この一九五六年(昭和三十一年)はどのような時代であったのか。そして尾崎財団が生まれた背景には何があったのか。同年の出来事や文化、世界情勢を振り返りながら当時に想いを寄せたいと思います。

(三) 国際社会、とりわけ若き日の留学先やテオドラ夫人の母国でもあったイギリスと、東京市長時代に

ワシントンへ桜を贈ったアメリカに縁のある国会議員であったこと。

一九五六年といえは一九四五年の終戦から十一年、そしてアメリカGHQによる占領政策が終了した一九五二年(昭和二十七年)、サンフランシスコ平和条約の発効に伴う主権回復から僅か四年後です。さらには戦後日本における復興の象徴となった一九六四年(昭和三十九年)の東京オリンピックの実に八年前になります。

尾崎は主権回復の二年前、一九五〇年(昭和二十五年)に前駐日米大使ジョセフ・グルー、ウィリアム・キャッスル等の主催する「日本問題審議会」の招待により最後の外遊を九十一歳で経験しています。当時の海外渡航はGHQに制限され、尾崎の訪米も当時の新聞では大々的に報じられました。のちに国民的歌手として知られる美空ひばりが偶然にも尾崎の出発と帰国に居合わせていますが、当時は罫堂の外遊記事に数行そえられる程度の扱いでした。

わが国の渡航制限が解除されるのはオリンピック開催の一九六四年一月まで待たねばならず、政治のみならず外交や文化、あらゆる分野において日本全体が国際社会への復帰と同時に戦後復興に挑み続けていた、いわゆる

前掲の『尾崎記念会館・時計塔建設記』(以下、『建設記』)にもありますが、そのきっかけは数名の国会議員のとりとめのない話から始まりました。

財団初代理事長を務めた川崎秀二(元厚生大臣)は鳩山一郎率いる日本民主党の出身で、のちに保守合同による自由民主党の結党にも加わります。

記念会館および時計塔の建設と財団の設立は、様々な要因が発端となりました。その中でも、次の三要件はある意味での幸いだったと言えます。

(一) これまでわが国に本格的な政治記念館が存在していなかったこと。

(二) 罫堂・尾崎行雄は、一九二五年以降は「無所属」であり、不偏不党の象徴たりえたこと。

一里塚であったと言えましょう。

「もはや戦後ではない」

当財団は一九五六年に設立されますが、その年の七月に発行された経済企画庁発行『経済白書』の副題に、ある見出しが添えられました。時の同庁調査課長・後藤譽乃助により命名された副題は、「アラビアのロレンス」の翻訳でも知られる英文学者・中野好夫がこの年の『文藝春秋』二月号に寄稿した随筆「もはや戦後ではない」に由来します。この言葉は当時の流行語にもなりました。

罫堂が没した一九五四年(昭和二十九年)十二月から始まった「神武景氣」が一九五七年(昭和三十二年)六月まで続いたさなかであったことも、尾崎記念会館建設の機運に弾みをつけたのかも知れません。

一九五六年当時の世界情勢

『建設記』にもありますが、この年、国内では自由民主党による総裁選が行われます。その総裁選を制し、十二月二十三日に第五十五代内閣総理大臣に指名されたのが石橋湛山です。石橋湛山は十二月十日に行われた当財団の設立総会にも出席しています。

当時の世界情勢に目を向けると、北大西洋条約機構(NATO)に代表される西側諸国と、ワルシャワ条約機構

(WPO)の東側諸国に二分され、大戦後の緊張は未だに解けない状態にありました。

とりわけ年初の一月二十七日は東ドイツがワルシャワ条約機構へ加盟し、自由主義国と社会主義国の対立がわが国にも緊張をもたらしていました。後の岸信介内閣が一九六〇年(昭和三十五年)一月十九日に日米間における新安保条約を締結する四年前で、わが国の安全保障基盤をいかに確立するか、模索の時期でもあったと言えます。

ソ連との国交回復に向けて

一九五四年の神武景気と歩調を合わせるタイミングで発足した鳩山一郎内閣。その最大の外交課題は、西側諸国と東側諸国に挟まれる位置にあったわが国の進路をどちらに向けるのか、そのかじ取りが最大のテーマでもありました。

一九五二年のサンフランシスコ講和条約に当時のソ連は出席するも調印には至らず、条約の発効成立と同時にわが国はソ連との交渉窓口を失います。一方で戦後もなお続く日本兵のシベリア抑留、現在も続いている北方領土問題など、交渉の再開が数年来の重き課題となっていました。

昨年(平成二十七年)、憲政記念館では「戦後復興への道のり―吉田茂・鳩山一郎特別展」が開催されました。



「日ソ共同宣言」署名

ソ首相が共同宣言に署名、十二月十二日に発効しました。

翌週の十八日には日本の国際連合加盟が決定し、二十六日にはシベリアから最後の抑留者が京都の舞鶴港に到着するなど外交面でも大きな転機となりました。

また、シベリアから帰還した抑留者の中には罌堂の書生を二十年近くにわたり務めた石田正一氏(世界連邦建設同盟評議員)も含まれ、同氏の帰還は財団設立初期の運営においても大きな原動力となりました。

国内の主な出来事

一九五六年は国際社会のみならず、国内においてもさまざまな事が起こりました。時系列でなざると、いくつかの主な出来事を見つけることができます。

同展でご覧になられた方も多いかと思われます。

親米派であった吉田茂が「憲政の常道」に則り総辞職の道を選び、鳩山一郎へと政権が交代することで、ソ連との国交は回復の兆しを見せ始めます。

一九五四年から第一次・三次に渡り運営された鳩山内閣、その総仕上げと言えるのがソ連との国交回復でした。

国交回復と国際社会への復帰

日本とソ連の国交回復に至るプロセスに先鞭をつけたのは、五月十五日に河野一郎・農林水産大臣とニコライ・ブルガーニン首相により調印された「日ソ漁業協定」でした。

戦後のGHQ政策により、日本の漁業は遠洋操業の禁止など数多くの制約を強いられていましたが、一九五二年の主権回復と同時に操業は解禁され、北洋漁業の再開が決定されました。はじめ日本はアメリカ・カナダとの漁業条約を締結し、太平洋の北東部海域におけるサケ・マス漁は復活を果たします。

続いて日本政府はソ連との漁業交渉を開始、北方領土問題を巡って難航しながらも漁業協定の調印に漕ぎつけます。ここから国交の回復に弾みがつき、鳩山首相は十月十二日、河野農相などの随行団と共にモスクワを訪問します。フルシチョフ第一書記などとの首脳会談を経て十九日、モスクワにおいて鳩山首相とソ連のブルガーニ

・七月一日、気象庁が中央気象台から改称し、正式に発足する。

・七月八日、第四回参議院議員通常選挙が実施。同選挙では近藤鶴代(一九六二年には中山マサに続き、二人目の女性閣僚)、玉音放送の起草者の一人とされる迫水久常、尾崎行雄を慕い続けた元衆議院議員・本多市郎などが参議院議員として初当選。

・九月一日、横浜市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市の五市が初の政令指定都市となる。

文化面では五月九日に日本の登山隊がヒマラヤ山脈のマナスル初登頂に成功、後の登山ブームの発端となりました。五月十七日には石原慎太郎の小説を原作とした日活映画『太陽の季節』が公開され、弟の石原裕次郎が俳優デビューを果たすなどの話題が巻き起こりました。

また、音楽ではドリス・デいの「ケ・セラ・セラ」が洋楽の中でもヒット。オリジナルの他、ベギー・葉山や雪村いづみによる日本語バージョンも軽快なリズムで同年を代表する一曲となりました。日本語詞はベギー版、雪村版でそれぞれ異なりますので、今回、独自の訳詞をあててみました。

(原詞はレイモンド・バーナード・エバンズ、日本語訳は筆者)

When I was just a little girl
I asked my mother what will I be
Will I be pretty, will I be rich
Here's what she said to me

Que sera, sera
Whatever will be, will be
The future's not ours to see
Que sera, sera
What will be, will be

When I grew up and fell in love
I asked my sweetheart
What lies ahead
Will we have rainbows day after day
Here's what my sweetheart said

Que sera, sera
Whatever will be, will be
The future's not ours to see
Que sera, sera
What will be, will be

Now I have children of my own
They asked their mother, what will I be
Will I be handsome, will I be rich
I tell them tenderly

Que sera, sera
Whatever will be, will be
The future's not ours to see
Que sera, sera
What will be, will be

Que sera, sera

二〇一六年の「ケ・セラ・セラ」

「ケ・セラ・セラ」という言葉はフランス語、あるいはスペイン語に由来など諸説ありますが、文法上どの国の言葉であると特定することは困難です。近年の研究によると「疑似外国語」ということで、英語圏から見た「どこかの国の言葉」と解釈されることもあるようです。それゆえ、翻訳のしようも無かった訳ではありますが、続く「先のこと」は分からない」という歌詞の意味するところは財団に限らず、当時の誰もが感じていたことでありましょう。

本稿を綴っている段階で、安倍晋三・内閣総理大臣がロシアのウラジミール・プーチン大統領との首脳会談に向けて調整中との報せが飛び込んで来ました。先の「ケ・セラ・セラ」に準えるならば、その行先もまた分からない事ではあります。だからこそ、そこに願いを見出し、望ましき方向を思い描く価値があります。

小さいころ
ママにたずねたことがある
私かわいくなれるかな 幸せな子になれるかな
そしたらこう教えてくれた

それはケ・セラ・セラ
どうなるかしら
先のことなどわからない
けれどケ・セラ・セラ
願ったらそうなるかもね

大人になって恋をして
大事な人に聞いてみた
この先ふたり どうなるのかな
いつでも虹が見られるかしら
答えてくれたことはこう

それはケ・セラ・セラ
どうなるだろう
未来のことはわからない
それでもケ・セラ・セラ
だからこそ願おうよ

そして私も子どもが生まれ
いまではおなじことを聞く
格好よくなれるかな お金持ちになれるかな
私はやさしくこう伝えるの

それはケ・セラ・セラ
どうなるかしら
先のことなんてわからない
だからケ・セラ・セラ
願ったらそうなるかもね

それがケ・セラ・セラ

ロシアとの外交のみならず、私たち尾崎行雄記念財団にも同じことが言えましょう。昨年来、国立公文書館の建替えに伴う候補地にこの永田町一丁目一番地一号が有力であるという報道記事がみられるようになりました。その果てに尾崎記念会館、現在の憲政記念館がどのように変わっていくのか、それも現時点では予測しえないことであります。

『建設記』の中で川崎秀二・初代理事長が綴ったとおり、最初から決まっていたことなど何一つなかったのです。一人ひとりの想いが重なりあって大きく膨らみ、行動につなげていくことで現在の形になりました。そうした中でも憲政記念館は「政治を通じて日本のあるべき姿を思い描く」象徴であり続けてほしい。また、尾崎財団も豊堂・尾崎行雄がめざした議会政治の在り方を世に問い続ける存在であってほしい。

縁あつて皆様と同様、財団設立六十周年の節目に立ち会った一人として、強くそう願う次第です。

(了)

尾崎行雄記念財団設立六十周年 協力者一覧

赤田美香子	伊東弘泰	江川恵子	岡崎光子	兼松 恵
浅霧勝浩	伊藤由美子	大内伸代	岡田玖美子	上村ムツ子
浅霧琴絵	岩間一樹	大金直人	岡村みき	神山浩幸
浅野基子	岩本光正	逢坂誠二	奥本謙造	亀岡偉民
足立久子	上田 久	大槻明子	奥山利夫	加茂昭夫
新井明子	宇田みどり	大槻城一	尾崎行隆	川井清晶
荒木 瞳	内山恵子	大槻由美	尾崎行正	川崎 透
池尻公子	梅原康広	大橋孝夫	尾崎行昌	神崎美佐子
石井徒紗子	漆戸 啓	大橋 寧	片見正美	岸田和江
伊藤小百合	海野奈保子	岡 茂男	加藤 風	北川ゆかり

鬼頭国彦	左近充昭子	菅沼美年子	高橋宏之	戸上愛海
木村 愛	左近充尚典	菅原一秀	高村一郎	戸田善明
木村清信	佐藤慶子	杉村泰弘	高柳淳子	富永桂子
倉持文子	佐藤啓太郎	鈴木清人	瀧川紗智子	中川一光
黒崎ゆういち	佐藤太亮	鈴木幸一	田中幹也	長塚勝代
黒瀬佳代子	佐藤玉美	鈴木秀明	谷井忠道	中村尚子
古賀いずみ	佐藤利江	関根孝司	谷口正弘	西口 仁
後藤茂之	澤田外行	高木脩之	谷 島 力	西村圭生
小林美佳	椎名節子	高木美智代	谷畑 孝	仁分 眞
小山志賀子	塩崎 幸	高田八重子	谷山百合子	丹羽祐子
近藤幹子	鹿谷威夫	高橋秀五	田畑恒子	萩原直三
阪上順夫	篠木あつ子	高橋大輔	田村洋子	箱根芳子
櫻田義孝	島崎能充	高橋富代	妻島好子	橋爪節子
桜庭伸弘	ジョン・S・コールドウェル	高橋 渚	土井孝子	鳩山由紀夫

花島克臣	増澤 淳	盛田 武
原不二子	松岡 笙子	森 裕幸
檜山幸恵	松岡義博	柳坪絵理子
平石紀久子	丸田 徹	山内聖士
平塚 栄	三坂万里子	山家又祐
深川元紘	水上鞠子	湯沢宏昌
福井ゆかり	三ツ林裕巳	横山和子
藤澤まり子	三原朝彦	吉川秀隆
藤田幸久	宮良成香	渡辺隆一
古川宏子	向井澄子	
星 青	村岡清佳	
星名浩美	村上裕紀	
堀田美穂	村田恵子	

NPO法人 罌 堂 香 風
 NPO法人 一 冊 の 会
 尾崎行雄を全国に発信する会
 NPO法人 日本アビリティーズ協会
 一般財団法人 日本友愛協会
 公益財団法人 原田積善会
 NPO法人 INPS JAPAN
 ミクニ総業株式会社
 大橋物産株式会社
 タカラベルモント株式会社
 レストラン 霞ガーデン
 衆議院 憲政記念館

尾崎行雄記念財団 役員一覧 (二〇一六年十月現在)

会 長	大島理森	(衆議院議長)	常勤理事	石田尊昭	(事務局長)
副会長	羽田 孜	(元内閣総理大臣)	監 事	大森順方	(医療法人社団龍岡会理事長)
評議員長	高村正彦	(衆議院議員・元外務大臣)	常任顧問	北川正恭	(早稲田大学名誉教授)
評議員	阪上順夫	(東京学芸大学名誉教授)		吉川秀隆	(元三重県知事)
	結城豊弘	(テレビプロデューサー)		大橋 寧	(タカラベルモント(株) 代表取締役会長兼社長)
	谷藤悦史	(早稲田大学政治経済学術院教授)	顧 問	武部 勤	(大橋物産(株)代表取締役社長)
	木村利人	(早稲田大学名誉教授)		野田聖子	(元農林水産大臣)
理事長	森山眞弓	(元内閣官房長官／元法務大臣)		佐田玄一郎	(衆議院議員／元郵政大臣)
理 事	戸田善明	(公財)原田積善会相談役		山谷えり子	(衆議院議員／元内閣府特命担当大臣)
	萩原直三	(一財)日本友愛協会評議員／日本アビリティーズ協会副会長			(参議院議員／元国家公安委員長)
	尾崎行昌	(Y・Oエンジニアリング (株)代表取締役)	参 与	青木一能	(日本大学教授)
	原不二子	(株)ディプロマット代表取締役		板倉敬子	(かをり商事(株)代表取締役)
				カレル・V・ウォルフレン	(ジャーナリスト)

『尾崎行雄伝』

(沢田謙著、一九六一年)

第六章 改進黨・自由の泥仕合

板垣の遭難は、火に油を注ぐようなものだった。さなきだに藩閥政府の無法な圧迫に、いきり立っていた民心は、この事件に刺激されて、いつ暴動となつて各地に爆発するかしれぬ。政府の頭が痛いのはそれだった。

いつそ板垣に金をやって、一、二年の間洋行させたらどうだろう。ご本尊さまがいなくなれば、そのうち不穩の気もほとぼりが冷めるだろうし、さいわいヨーロッパには、伊藤博文が憲法調査のために行っている。あちらで板垣と、じっくり話し合いさせれば、妥協の道を見出せるかも知れない、と考えた。

太郎に交渉させたが、「わたしに、あの二人の洋行費を引き受ける義理があるでしょうか」と、岩崎の態度は冷たかった。

それを色々に口説いてみたが、「そんなら出してもよいが、返済期限はいつで、利息はいくら出しますか」と、岩崎のいうことはどこまでも水くさかった。

そこでこんどは井上馨が、直に三井の総支配人、三野村利左衛門に談じこむと、「三井銀行の陸軍御用が、本年（明治十五年）かぎり満期になります。それを明治十八年度まで延期してくださいれば、無条件で二万円出しましょう」という返事だった。陸軍卿の山県有朋に相談



「怪傑」と呼ばれた星亨

しかし身を持つること清廉な板垣のことだ。正面からそんなことを持ち出したら、一蹴されるにきまつている。そこで頭に浮かんだのが後藤象二郎のことだった。

几帳面な板垣と違い、豪放磊落な後藤は、そんなことには至ってズボラだった。洋行費がどこから出ようが、敵の兵糧を分捕って、わが用に供するのは、兵家の極意だぐらいの考えだった。

「だから、まず後藤をさそい、後藤に板垣を口説き落とさせて、二人いっしょに洋行させることにしよう」ということになった。

だがその洋行費はどうする？ まさか官金を出すわけにもいかないの、まず岩村通俊をして、三菱の岩崎弥

すると、山県もよからうというので、これで洋行費はできた。

このことは、後藤は知っていたが、板垣はむろん何も知らなかった。あるいは一生知らずに終わったかも知れぬ。後藤から「政府の奴等はいつともこいつも洋行するのに、自由民権をとる我等が、西洋の土も踏んだことがないので、国民を指導する上から甚だ心外にたえぬ。どうだ、おれといっしょに洋行しないか」と水を向けると、はたして板垣は「僕もかねて一度洋行したいと思っていたところだ。しかし洋行費はどうする」とたずねた。

「それは心配するな。僕にまかせておけ。蜂須賀（茂韶）侯にでも心配さすつもりじゃ」と後藤がいうので、ここに二人の洋行がきまつたのである。

ところがこの「政府―三井―洋行費」の関係が、三菱方面からつつぬけに、改進黨にもれた。かねて犬と猿のように、自由党といがみあっていた改進黨が、黙っているはずがなかった。

さっそく沼間守一の東京横浜毎日新聞が、これをすっぱ抜き、廉節の士、いまだ必ずしも廉節をもって終わらず」と題して、猛烈に板垣を攻撃しだした。これを口

火にして、改進黨の新聞が一斉に火ぶたを切り、総攻撃をはじめたのである。

それは自由党の内部にも、大きな動揺を与えた。とくに大石正巳、馬場辰猪、末広鉄腸などが中心になって、板垣の洋行に対し猛烈な反対運動を始めたので、騒ぎが大きくなった。

大石や馬場は三菱に近かったので、その方面から情報を得ていたのだから、板垣は洋行の出所なんか、まるで知らないのだから、真っ赤になって怒りだした。

「反対党が、でたらめな中傷記事をかかえて攻撃するのはやむをえぬが、君たちまでが、反対党の策略にのって党内を動揺させ、我輩の人格を傷つけるとは何事だ」と党の幹部会でどなりつけた。が、大石や馬場は屈しない。もし板垣がどうしてもきかないなら、脱党しようとして息巻いた。

党の幹部たちは、なんとかして調停しようと腐心したが、適当な仲裁人が見つからない。結局、新入党員の星亨に、調停をたのむほかあるまいということになった。

まもなく自由党の牛耳をとり、改進黨の尾崎と、無二の好敵手となった星亨はここにはじめて登場するのである。しばらく星亨の素性をあらって見ねばならぬ。

万延元年、一家は横浜に出てきた。そしてすでに十二

歳の少年になっていた星は、渡辺禎庵という蘭法医の弟子に住みこむことになった。さしあたりは玄関番で、主人が回診の際に、薬箱を持って、お供するのが彼の役目だった。彼が英学を学んだのは、このころである。

元治元年（一八六四年）、星も十五歳になった。そろそろ薬箱持ちがいやになった彼は、志を立てて上京し、幕府の開成所という洋学校の苦学生になった。これが彼の出世の糸口になったのである。

勉学二年の後、彼は紀州藩にむかえられて、まもなく兵学寮勤務を命ぜられたので、和歌山に赴任した。これが十九歳の時で、それからまもなく明治維新となり、陸奥宗光が紀州藩にもどって来た。この陸奥に、その人物を見出されたことが、星の一生に大に関係するのである。

そのころ大阪の紀州屋敷では、明治天皇の行幸を迎えたという因縁から、大玄関に御簾みすをおろし、奏任官そうにんかん以下昇降を禁ずと札がかけてあった。ほかの連中はやむなく内玄関からはいったが、星の姿が見えないので、「星はどうした」と陸奥がたずねると、「今日は帰る。他日参議になったら、この玄関からはいると言ってくれ」と、

明治時代に活躍した政治家の中で、星ぐらい、出生のはつきりしないものはない。あるいは賤民の子だとも、また母が山賊にはらまされて生まれた子だともいわれた。が、ほんとうはれっきとした江戸の生まれである。江戸は築地小田原町の左官屋、それもただの職人ではない、佃屋という屋号をもつ親方の子である。

星はその長男で、嘉永元年（一八四八年）に生まれたが、彼が生まれて何ヵ月もたためぬのに、父が山のような借金に責められて、妻子をおきざりに夜逃げしてしまった。

幼子三人をかかえて、さっそく生活に詰まった母は、近所の人たちに、洗濯物や使い走りをたのまれて一時をしのいだが、とうとうやりきれなくなって浦賀の生家に帰り、世話をする人があって、星泰順という医者のごころに再縁した。彼が星姓を名のようになったのは、これからである。

泰順はいかにも善良な、親切な人だったが、医術のほうはいたってヘボで、とても医者ではくらしが立たぬから、大道易者をはじめた。妻はそのそばで、サザエのつぼ焼きを売って、細々と煙をたて、まだ七つ八つの星が、小舟をあやつって、船々に膏藥を売り歩くという、みじめなありさまであった。

捨て台詞をのこして帰ったというのだった。

足かけ五年ぶりで、星は生まれ故郷の東京に戻り、陸奥の尽力で、大蔵省の雇いになった。月給は百円であったが、当時の百円はだいぶ使いであつた。親分肌の星は、困っている書生があると、どこの馬の骨かわからぬ奴でも引っぱって来て、食わしておいた。そしてこの連中を引き連れて、吉原の遊郭にくりだした。

ところがある夜、地回りのゴロツキと大喧嘩をやり、取り静めに来た薩摩人の巡查をなぐったというので拘引こういんされてしまった。喧嘩をしたのは、つれの書生たちだったが、巡查をなぐったのは星だった。

そのうち陸奥が、神奈川県令から転じて、大蔵省の租税頭そせいのかみになると、星も租税寮の官吏に採用され、明治七年（一八七四年）には横浜税関長に任ぜられ、従六位を授けられた。とうとう彼も、紀州屋敷の正面玄関から昇降できる、奏任官になったわけである。

母は大喜びで、心祝いに赤飯をこさえ、せがれの前に手をつけて「おめでとうございます」といった。すると彼は急に顔色を変え、膳の上によそってあつた赤飯を、いきなり庭に放り出した。「わずか従六位の官員になったからといって、お祝いとはなんだ！」

いつも母親にはやさしい星も、この時ばかりは大声でどなりつけた。官吏になることを立身出世とする、官尊民卑の風が、彼は無性に腹立たしかったのである。

星は横浜税関長となって、何ヵ月もたたぬのに、またも問題をひき起こした。イギリス領事と横浜税関との往復文書に、クインという語を「女王」と訳して送ると、領事方では「女皇」と訳すべきだといって抗議してきた。が、星は「英語について、イギリス人が文句をいうなら、わかっているが、日本語について、イギリス人の指図をうけるいわれがない。女王でも女皇でも、意味に変わりがないなら、いいじゃないか」と、どうしてもゆずらぬ。「どちらでも同じなら、直したらいいだろう」というと、「いや、どちらでもよいから、直さないのだ」と、がんばる。小さなことのようにだが、事いやしくも、一国の元首の尊号に関する問題だから、イギリス領事はこれを外務省にねじ込んだ。外務省では恐縮して、星に謝罪を要求したが、星は謝罪の理由がないといって強硬に拒んだ。やむなく政府はついに星を免職にして、二円の罰金に処した。

のちに彼は、「ホシトオル」ではなく「オシトオル（押し通る）」だと言われたが、いやしくも自ら信ずるところ

から代言人というのも、けっして下等な職業ではないといふことがわかり、星の名声はにわかに上がって、依頼者がぞくぞく押しかける盛況になった。

ところが明治十四年の末、代言人規則は改正になり、これまで免許状をもっているものでも、あらためて資格試験をうけねばならぬことになった。アメリカの法学大博士で、東京大学の教授をした鳩山和夫でも、フランス法学の大家・大井憲太郎でも、みんなこの時試験をうけた。

ところが星は、試験もうけない、代言人もやめないと、がんばった。「我輩は司法省附属代言人である。そんならなぜ司法省は、試験をうけねば資格の有無さえわからぬものを、附属代言人に採用したのか。もつともこれは、司法省が軽率だったとあやまるなら、勘弁してやるが、我輩はイギリスの法学院から、バリスターの資格を与えられている。それでもまだ試験が必要だというのは、イギリスの法学院を侮辱するものである。イギリス政府に照会して、その意見をきいた上でなければ、我輩は断じて試験をうけない」

これには司法省も閉口して、とうとう星だけは、無試験で免状を与えることになった。当時法学者としての名

ろは、一歩もゆずらぬという強情ぶりは、このころからであった。

しかしこんどは、ゴロツキと喧嘩をして、巡査をなぐったのちがいが、理はたしかに星にあるのだから、陸奥が承知しない。大隈大藏卿に強談判のすえ、結局星をあらためて大蔵省理事官に任じ、イギリスに派遣することになった。

明治七年の末にロンドンについた星は、有名な法学院ミドル・テンプルに入学した。当時日本の留学生は、ほとんどすべてが官吏を目的に勉強したものであるが、生まれつき官吏ぎらいの彼は、弁護士業によって、独立独歩のくらしを立てようというので、この学校を選んだのであった。

留学三年、星はりっぱにバリスター（弁護士）の免状をえて帰朝した。このころは日本でもすでに代言人規則が制定されていたが、まだ旧幕時代の下劣な公事師の風が改まらず、代言人（弁護士）は「三百代言」といって、卑しまれていたものだった。

何はともあれ、この代言人社会を改革するのが急務だといので、星はさっそく司法省に建言して、司法省附属代言人を設けさせ、彼もこれに採用された。これ

声では、星もついに鳩山にはおよばなかったが、星の扱ったのは、主に外国関係の大訴訟だったので、彼の収入ははるかに鳩山をぬき、数年のうちに、巨万の財産をたくわえたのであった。

この星を自由党に紹介したのは、後藤象二郎であった。板垣は「世間では、火つけ泥棒、自由党などといっているくらいだが、星のような金持ちが、はたして入党するだろうか」といったが、後藤が自邸に、板垣と星を招いて会見させると、たちまち意気投合して、星の入党がきまったのであった。この新参の星が、いよいよ大石、馬場一派との調停役に立つことになったのである。

その日、井生村楼では、各府県から集まった二百名あまりの党員が会合をひらいていた。その席上で、またも板垣と大石とが、激論をはじめたのだ。

今し大石が、板垣のフロックコートの裾をとらえて、何か論じているところだった。うしろから、大石の首のところを、人さし指で、チョイチョイとついたのが、星だった。

「大石、ばかなことは、やめたらどうだ」「何がばかだ」と大石がふりむいた。「ばかだよ。板垣が、どうしても

きかぬといったら、どうする」「そうになったら脱党のほかない」「脱党するんなら、男らしく、早くしたらよろう」

とんでもない男に、仲裁を頼んだものである。これでは仲裁ではなくて、喧嘩の火つけだ。こうして大石、馬場、末広以下二十名が、憤然として脱党してしまった。しかし星は「大石や馬場が出て行っちゃって、そのかわり我輩がいるから、いいじゃないか」とすましたものだった。

星が一躍、自由党の重鎮にすわりこんだのは、これからであった。ただ、さすがの星も苦しんだのは、自由新聞の経営であった。資金の方は、弁護士で稼いだためた巨万の富をつぎこむにしても、人間の方はそうはいかぬ。

これまで自由新聞が重きをなしたのは、馬場辰猪、末広重恭、田口卯吉の三人が、くつわを並べてはる筆陣であった。この三人がそろって脱党したのだから、たちまち弱った。

すると、そこに飛びこんできたのが、かつて民選議院設立建白書にも名をつらねた、古沢茂であった。古沢は、三菱と大隈の關係について、政府筋からでた材料を、わんさと持っていた。星は会心の笑みをもらした。「よし、

諸君の血のしたたりですぞ」

壇上の弁士が叫ぶと、聴衆はワッと沸きたったのだった。「そも岩崎弥太郎とは何者ぞ。前参議大隈重信をだきこみ、国庫の金をごまかして、今日の大をなした海坊主である。改進黨は、口に愛国をとえながら、この海坊主の利益をはかる偽党である。大隈を倒し、海坊主を退治するのが、わが自由党の任務であり、国民諸君にむくゆる道である」

聴衆はいよいよ熱狂し、場内はわれるような騒ぎになるのだった。こうして「偽党撲滅」「海坊主退治」この二つのスローガンは、たちまち全国に反響した。自由党は、四方八方に弁士を派遣して、いよいよ国民を扇動するのだった。

それを苦々しげに眺めていたのは、高知の大獄に連座して下獄し、最近牢屋から出て来たばかりの陸奥宗光であった。「あんなことに熱中するのは、君のために惜しむね。敵は改進黨ではない。われらの目的は藩閥の打倒なのだ」と、陸奥はいった。

が、星がどうしてもきかないので、陸奥は声をあげまして、「では君は、将来改進黨と、手をにぎる必要が起らないと、断言できるか」となじると、「それはそれ、

古沢を主筆にして、この材料で、改進黨をやっつけてよろう。板垣の洋行問題で、さんざん叩かれた、しつぺ返しだ！」

もし板垣が日本にいたら、こんな問題を政争の具に供することを好まなかっただろう。が、星はそんなことを気にする男ではなかった。

明治十六年の春、井生村樓の自由党総会で「自由党と改進黨とは、その根本において、相容れざるものがある。わが党は正党であり、改進黨は偽党である。この際まず、偽党を撲滅せねばならぬ」と、満場一致で議決された。

こうして自由党が、偽党撲滅・自由万歳の旗高らかにかけて立つや、その人気はすばらしいものだった。かねて三菱の横暴は、国民のひとしく憤慨しきっていた折だったので、どの演説会も、われるような盛況であった。

六月十日、東京の新富座における演説会などは、聴衆の殺到にそなえて、あらかじめ木戸前に柵をつくって整理していたが、殺気だった聴衆は、柵をこわしてなだれ込むありさまであった。

「諸君、見たまえ、あの茅場町の河岸に並んでいる、七棟の三菱倉庫を。あの夕日に赤々と照るレンガの色こそは、われら国民の血をもって、ぬられたものである。

これはこれです」と星は答えた。「問題によってあるいは離れ、あるいは合するものが、政治家の態度です。もし改進黨が、今日のことを根にもって、将来当然手をにぎらねばならぬ時に、それを拒むなら、非は改進黨にある」理はまさに星のいう通りだった。が、人間は感情の動物であり、政治は生きものである。なかなか星のいう通りに、時勢は動かなかった。

それは明治十六年三月のことであった。尾崎は矢野文雄とともに東海道遊説の旅に出た。人力車をつらねて、ここに一泊、あそこに一泊と、道々黨員をつのりながら、悠長な旅であった。が、至るところ、自由党の妨害にあうので、実是一向のんきではなかった。やっと名古屋について、宿屋にとまっていると、自由党の内藤魯一が、三十人ばかりの壮士をつれて、面会を求めてきた。

「いったい報知新聞は、なぜ国家の害物たる三菱を攻撃しないのか。返答をうけたまわりたい」と、語気もするどくつめよった。うしろには三十余名の壮士が、腕をさすってひかえている。返答しだいでは、ひと騒動はまぬがれぬ形勢であった。

すると矢野が、おもむろに口をひらいて、「お話はもつともである。帰京後、とくと事情を取り調べたうえ、

国連は「天空の王国 (Kingdom in the Sky)」と呼ばれるレソトで、二〇一五年九月二十五日に国連加盟国が採択した十七項目の目標から成る「2030アジェンダ」を達成するために、今後十五年で持続可能な開発目標 (SDGs)、とりわけその第一目標 (あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ) の実現に向けた支援を進めている。

国連ボランティア (コミュニケーション担当) のシルビア・ティーセツォ・カベレ氏はIDNの取材に対して、「国連がSDGsに関して今年特に重視していることは、たとえば、アジェンダ2030の実行に向けた各国及び国連システムのキャパシティ強化です。」と語った。



国連、レソトの貧困撲滅支援強化へ

カベレ氏はまた、「私たちは、レソト政府がミレニアム開発目標 (MDGs) に関する最終報告書を仕上げるのを支援していきます。これは、これまでの教訓を振り返るとともに、SDGsを実現するためにそれらの教訓をどのように活かしていくべきかについても反映したものになるでしょう。」と説明した。

二〇一五年のレソトに関する「国連国別報告」によると、同国は最近、「中所得国」に格上げになったが、依然として貧困と格差の問題は解消されていない。つまり、人口の五七・二％は貧困層で、特に農村部に集中している。

「レソトは、バソト族、とりわけ若者を貧困から引き上げるために、包摂的な成長と強力な民間部門の参加を必要

はたして諸君のいう通りなら、しかるべく論評するだろう」と、ごくものやわらかに答えた。

矢野は長者の風のある人だったから、自由党の連中も、この答えをきいてうなずいた。そしてこんどは尾崎にむかい、「矢野君がすでに承諾した以上、君もむろん異存あるまいな」と念をおした。

この時、「もちろん」と一言いいさえすれば、事はすんだのだ。が、内藤らが力をたのんで脅迫的に出るのが、しやくにさわったので、「僕は不同意だ。攻撃しようとしまいと、こちらの勝手だ」と答えた。さあ壮士連が怒るまいことか。

「生意気な奴だ、二階から放り出せ」「なぐり殺しちまえ」——ものすごい勢いで尾崎に迫って来た。が、さすがに親分で、内藤が「矢野が承諾した以上、尾崎のような小僧のいうことは、相手にするな」と制したので、壮士連は悪口雑言をはきながら、席をけて引きあげた。

それからというのは、散歩に出れば、うるさく大道で談判をひらくし、演説会をひらけば、ぶちこわしに来るし、まことに厄介であった。

こうして自由党と改進黨とが夢中になって争っているのを、してやったりとほくそ笑んでいるのは、ほかなら

ぬ藩閥政府だった。

さきには金を出して、板垣に洋行させて、改進黨に自由党を攻撃させ、今また自由党に材料を与えて、海坊主退治の戦いを起こさせた。まったく藩閥の思うツボだった。

その間だけでも、政党の藩閥攻撃の鋒先はにぶる。それほどばかりではない。このため自由党も改進黨も、たがいに少なからず手傷をおうたのである。

それを知らぬ両党の幹部ではなかった。両虎戦えばふたつとも傷つく。藩閥打倒、民権樹立という、本来の使命を忘れ、むざむざ藩閥の術中におちいつて、兄弟が血で血をあらうような争いを続けるのは、馬鹿げたことだと知りながら、勢いのおもむくところ、ついに共倒れのみじめな境遇におちいったのは、あさましいかぎりであった。

(次号・第七章に続く)

としています。というのも、レソトの人口の半分以上は二十四才以下だからです。」とカベレ氏は語った。バント族はバントゥー系の民族集団に属し、その先祖は、五世紀頃から南部アフリカに居住している。

国連諸機関は、国々をSDGsに取り組ませ、それを各国の計画・政策の主流に取り込み、実行させるうえで極めて重要な役割を果たしている。国連システムは、各国による「持続可能な開発のための2030アジェンダ」履行を支援するために、「主流化・加速・政策支援」(MAPs)と呼ばれる指導ツールを開発している。

国連は、MAPsの策定に続いて、レソトのパートナー諸団体との協議に向けた「SDGsロードマップ」を起草した。「政府との協議は、貧困や保健といった多分野にわたる問題に対処するための既存のメカニズムの強化に焦点を当てることとなります。政府の行動計画を支援するためには、証拠に基づいたさらなる勧告や、介入に向けた詳細なコスト計算が必要となるかもしれません。」と、カベレ氏は付け加えた。

国連は、欧州連合(EU)やレソト統計局、開発計画省との協力の下、持続可能な開発プロジェクトに向けたデータの策定も目指している。こうした介入は、質の高いデータの利用促進や、利害関係者間の調整、リーダーシップの強化、開発データの普及・利用を促進することによって、国家戦略開発計画(NSDP)やSDGsに体现された国

グラム』を通じて、二万五千人以上に対し栄養補強食品を提供しました。これらの能力強化プログラムには、食糧危機に対する緊急早期警戒、対応準備、緊急対応に向けた主要機関の能力強化のための技術支援も伴っています。」と語った。

国連はまた、補助金の受給者の間で家庭菜園や栄養教育を促進することを通じて、社会的保護と農業の統合に向けても取り組みを進めている。

カベレ氏は、環境・天然資源管理が地域住民の生活を改善し維持するうえで重要であることを強調し、「国連は、持続可能な土地管理や、保全を基盤とした農業生産技術／実践、再生可能エネルギー技術の応用に関して地域社会を動員し訓練を提供しています。」と語った。

「レソトの若者失業の経済的影響、二〇一二年十一月」によると、二〇一〇年におけるレソトの若者失業率は国際労働機関(ILO)の推計で三八・〇%であった。

他方で、開発計画省のムフォ・モシリ広報官は、「とりわけ貧困撲滅に向けてSDGsを実行するに際して拠り所となるロードマップはすでに存在しています。」と指摘したうえで、「議会に対する説明も既に終わっており、国会議員からも高く評価されています。これからすべきことは、実際に地域に出向いて、SDGsとそれに何が伴っているかについて人々の理解を広めていくことです。」と語った。

「レソト国連開発支援計画二〇一三―一七」によれば、

家的、地域的、世界的目標の実現に貢献することになるだろう。

カベレ氏は、「国連はNSDPに沿って、持続可能な農業の成長、食糧安全保障、エネルギーへのアクセス、気候変動への対応力を強化するための支援をレソトの民衆や政府に対して行う一方、天然資源の持続可能な利用を確保し、環境保護も推進しています。」と強調した。

「レソトは、貧困と飢餓を半分にするというMDGsの目標達成においてかなりの後れを取りました。この国の地理と社会経済的条件を考えれば、農業や環境、天然資源管理は、レソトが今後SDGsを達成できるかという問題において重要な役割を果たすことになるでしょう。残念ながら、これまでのところ関連部門の全体的な成果は期待に見合うものではなく、貧困や慢性的な食糧不足を悪化させ、多くの国民の健康を害しています。」

今日まで、かなり多くの進歩的な農民が、様々な国連機関の支援を得て、中小規模の農業ビジネスベンチャーを立ち上げている。「これらのビジネスは主に園芸(温室栽培)関係で、小規模な畜産(家禽類、豚など)はあまり着目されていません。」

カベレ氏はさらに続けて、「国連諸機関は、レソト国民の中で最も脆弱な立場にある人々が多面的な対応力を身に付けることができるように、取り組みを続けています。

二〇一四年だけでも、国連は、『国連食糧・資産交換プロ

開発計画省は、政府の優先順位とすり合わせながら国連の活動を導くために設置される「国連国家プログラム運営委員会」の構成メンバーになる。この点で、この文書は、レソト政府が、国連諸機関が支援しているプログラムの定期的なレビューや関連する計画会合に同機関を招く予定だと述べている。

レソトでは貧困が蔓延しており、農村部がもともと打撃をこうむっている。というのも、雨水に頼った農業が主流であり、生き延びるためのその他の手段を持ち合わせていないからだ。

国連が作成した「国連諸機関が一体となった任務遂行(Delivering as One)」ツールキットによれば、「国連は、証拠に基づく政策助言を行い、イノベーションと国際的な実践を共有することによって、レソトの抱える開発上の難題解決の支援を行う。」さらに「国連は、レソト政府が、開発アジェンダに取り組み、国家能力を強化し、さまざまな利害関係者をまとめて多分野に亘るプロセスを促進し政策やプログラムを成功に導く支援を継続していく。」と述べられている。

【マセルIDN＝マジャラ・モルーペ】

財団だより

「会員・支援者が紡いだ六十年の歴史」

石田尊昭（当財団理事・事務局長）

今年、尾崎財団は六十周年を迎えました。この六十年は、尾崎行雄の理念を基に民主政治の発展と世界平和に尽くそうという強い信念・志を持った人たちが紡いだ歴史です。それは、設立者や運営者のことではありません。この財団の活動に心から賛同し、惜しみない協力を頂いた会員や支援者のことです。

尾崎財団はもともと、現在の憲政記念館の前身「尾崎記念会館」建設の寄付を集めるために、数名の国会議員と民間有志だけで立ち上げた組織です。尾崎行雄が「資産」を残したわけでもなく、設立時から財源基盤がほとんどない、「財団」とは名ばかりの組織でした。

そんな「脆弱な」組織が、時の衆議院議長を会長に戴きながら、超党派の独立した公益団体として今日まで歩むことができたのは、ひとえに会員・支援者の「力」によるものです。

活動の財源は、年会費・個別寄付・催事参加費のみで、今も昔も財源基盤は脆弱です。しかし、活動内容は年々広がりを見せ、人材育成（罌堂塾）や出版活動（尾崎・政治関連書籍）はここ数年、これまでにないほど活発になって

います。そして二〇一一年以降は、NPOと連携しながら被災地支援にも取り組んでいます。

以下は、尾崎行雄三女・相馬雪香さんの言葉です。「私はちっとも偉くなんかありませんよ。本当に偉いのは、同じ志を持って集まってくれて、活動の輪を広げていってくれている人たちです。私はただ言い出すただけなんだから。周りが偉いんです。」（『平和活動家・相馬雪香さんの50の言葉』より）

尾崎行雄の二十五回連続当選、衆議院議員勤続六十有余年という記録は、尾崎行雄の偉大さではなく、伊勢の有権者の偉大さを意味するものです。同じく、尾崎財団設立六十周年も、設立・運営者によるものではなく、会員・支援者の成果であり、信念・情熱・行動力によるものなのです。

世界と議会（第五七五号）

定価五百円

発行所 一般財団法人 尾崎行雄記念財団

〒100-0001 東京都千代田区永田町1-1-1 憲政記念館内

電話 〇三（三五八一）一七七八

ファックス 〇三（三五八一）一八五六

ホームページ <http://www.ozakiyukio.jp>

メール info@ozakiyukio.jp

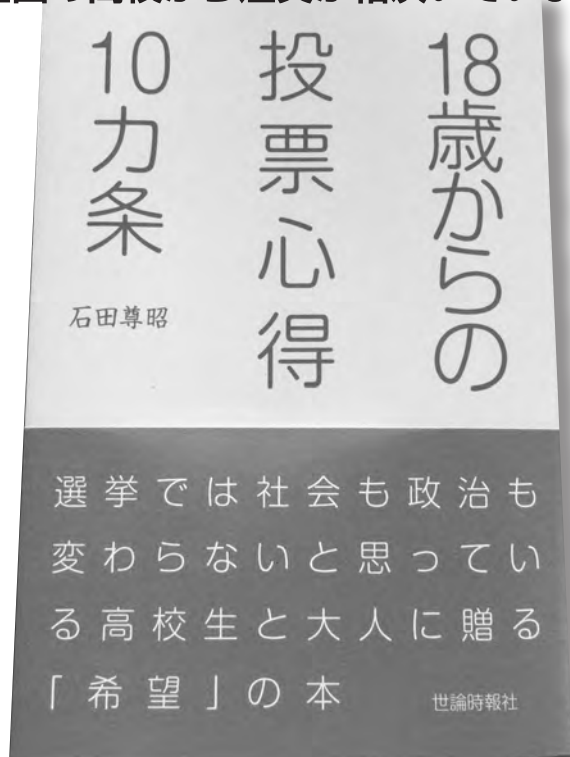
18歳と19歳の男女240万人が投票します。

第1条 何よりもまず、自分はいかなる政治を希望するかという自分の意思を、はっきりと決めてかかることが大切だ。選挙は、国民の意思を国政に反映させるために行われる。つまり、反映する本体がしっかりしていなければならない。有権者自身に政治的意思——どのような政治、どのような国・社会を実現したいと考えるのか——がなければ、いくら投票しても意味がない。

●主な目次／民主主義と“格闘”しよう／選挙・政党・議会／民主主義と立憲主義／投票の心得10カ条／議員の資格10カ条／「考える力」とメディア・リテラシー他



全国の高校から注文が相次いでいます。



石田尊昭 著

一般財団法人 尾崎行雄記念財団
理事・事務局長

本体価格：1,200円＋税（送料無料）
本書のお求めは最寄りの書店、もしくは世論時報社に
直接お申し込みください。短日でお届けいたします。

高校生と指導の教員に
未来をつくるため知ってほしい
「投票」することに変化する
ことが沢山あることを――。

好評発売中



尾崎行雄記念財団様と共に歩ませて戴き お蔭さまで創業 56 年を
迎えました これからもお引き立ての程よろしくお願い致します

-都会のオアシス- レストラン 霞ガーデン

代表取締役 渡辺 隆一

東京都千代田区永田町 1-1-1 憲政記念館内

Tel 03-3581-1655

Fax 03-3581-9941